

## ◇「宇宙・医学・栄養学」誌 創刊にあたって



「宇宙・医学・栄養学」誌

編集委員長

二川 健(徳島大学 宇宙栄養研究センター センター長)

2019 年は、アームストロング船長が月に降りたってちょうど 50 年目です。これを記念して NASA は、2024 年までに人類を再び月面に送る「アルテミス計画」を発表しました。このミッションは、史上初となる女性の月面到達も目指す計画です。幸運にも、我々もこの有人宇宙開発の節目となる年に、本雑誌「宇宙・医学・栄養学」を創刊することとなりました。

アルテミス計画をはじめ、火星探査も視野に入れた、いわゆる 21 世紀の新しい宇宙大航海時代が幕を開けようとしています。15 世紀半ばに始まるヨーロッパの大航海時代では、遭難や難破、壊血病や疫病感染などによって、乗組員の生還率は 20%にも満たないほど危険極まりないものでした。もちろん、無重力や宇宙放射線などの宇宙環境が人体に及ぼす影響などに関する情報は、15 世紀のものとは比較しようもないほど多いですが、人類を火星に送るということは、人類史上最大の出来事と言ってもよいでしょう。我々の有するすべての知識、資金をつぎ込むに値する事業です。そのような大事業に、我々は、医学と栄養学の面からサポートしたいと考えています。

「宇宙と医学・栄養学がどのように関連するの？」という疑問に思う人も多いでしょう。宇宙飛行士が、安全・安心して、火星で活動するためには、宇宙環境により起こりうる疾患(いわゆる宇宙病)と考えられる骨粗鬆症、筋萎縮や放射線障害などを克服するには、医学の進歩が必須です。また、宇宙での活動が長くなればなるほど、外科的な疾患に対する対処方法も必要となってきます。幸運にもこれまでは宇宙で手術が必要な事故やけがはありませんでしたが、無重力でも宇宙飛行士は捻挫や打撲を頻回に経験しているそうです。さらに、今後は男性を上回る数の女性宇宙飛行士が宇宙に飛び立つのではないのでしょうか。これまではほとんど無視されてきた産婦人科的なケアも必須となることが推察されます。一方、宇宙飛行士はロボットで無いので、宇宙でも食事をしなければなりません。栄養素不足で無くならないように、食糧を供給できるようにしなければなりません。

本誌は、人類が火星面に降り立ち、そこで生活できるようになることやそれを目指そうという方々に有益な情報誌となることを目指しています。しかし、余り専門的にならず、単に宇宙に興味のある人でも楽しくアクセスできる議論できる場にしたいと考えています。そのためには、有人宇宙開発の鍵となる「医学」と「栄養学」をわかりやすく読者に解説することが必要です。そして、人類共通の課題である「宇宙には地球外生命は存在するのか」、「我々人類はどこからきたのだろうか」といった問題に挑戦しうる若者を発掘したいと思います。ともすれば、近年の宇宙開発は経済活動の一環として諮られことが多く、本雑誌は、(有人)宇宙開発を、「夢」や「熱意」をもった温かいものにしたいと思っています。数十年後、宇宙に飛び立った日本人が、「この本を読んで宇宙を目指しました。」と言ってくれることを願い、創刊いたします。

以上